

翻刻『会稽多賀誉』（下）

翻刻の会

一、底本には大阪府立中之島図書館の七行九十七丁本を用い、適宜、京都府立総合資料館、京都大学附属図書館の所蔵本を参照した。

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。

2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。

3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ヽ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

澤恵里香、城阪早紀、樋口吉男、江南昌樹、竹内淳之介。  
文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

（山田和人）

ついたる折フシからに。組地色ワ子引連九鬼数兵衛。ヤア作十郎の横道者。上をたばかり工たくみの段々。遂ちく一に頭あちはれて殿の御機嫌もつて以外。広庭ひろはでお手討と御意を受た此数兵衛。引立に来つたりとの、しれば。様子地ハルを聞て驚おどろく姫。唐橋ウ扱はと心に点ちき。諛詞意と有ばぜひもなし。いざ御同道どうくサアあゆめと追取かこめど悪ウびれす。是ハルなふ待てととむる姫。押退のけく広庭ハツマシさして引立行。姫地ハルウはり、しく帯引色しめ。一ツ旦たん定たんまる殿様の安否あんひ。生死一ツと庭伝こぼつたひ跡色を。したふて三重へ  
広座敷。政道地ハルくもらぬか、み山。早枝殿の奥庭先泉水。築山物好の。其風流キンに引かへて。下部ハルキンかはこぶ水（五十一才）手桶  
土壇下たんの。拵へ調ひしと。言上すれば押中ひらく。障子ウの内は銀燭台昼かと。疑ふ金殿に。時元ウコハリ卿は巖然と。切り柄つかはめし新身あのみ  
の刀。引さげて立給ハルへは。左右を守護する近習の大勢フシさも目さましく見へにける。  
太守地色ハル仰出さる、は。作十郎事幼少ようぢより膝元にて育そだちながら。私の趣意しゆみに我を欺たほかり。暇を乞はにつくさしれ者。ソレ引出せ  
の壇地ハルの下。はつと答こたへる繩取なわに引立られて唐橋は。死地につく身も業ごう因いんと。諦あきらむれ共猶残る。無念は顔にあらはれて用意中フシの。  
席に座し居たる。兼地色ワて意趣有九鬼数兵衛。したり顔ハルにのさはり寄。ハレヤレ唐橋不便びん千万。執頭しやくづ顔に羽をのしたも。（五十  
一ウ）終つひには大小もぎ取れ。見るかけもない羽拔鳥。コリヤヤイ三ヶ国の物知モノ杯はと。広言かうげんはいた瀬左衛門は学太郎様か辛さ  
し料理。弟の其方も殿の御中前まへで縛しばり首。扱々お手討に縁の有。兄弟では有はいと嘲地ハルる詞ことばに屈かせぬ唐橋。盛衰詞は此身にかぎ  
らず。保元には悪源太源氏嫡流の御身でさへ。六条河原で縛り首。善悪共に皆天命。サアさつはりと遊あそべせと。色地ハルも変へんせぬ  
丈夫ウツシの一言。ヲ、よき観念ねん出だかしたり。生置なまなは一方の役にも立たべきあたら若者。ぜひに及ばぬ覚悟せいと。件地ウの一刀拔給  
へは。近ちか習は立寄手桶中の水。さらく算かひのしげみにかくれ。（五十二才）息ウを詰つたる折田平五。欠出くとあせり給ハル中ふ

姫君を。じつととめて窺ひ居る。作十郎は覚悟の合掌。南無あみだ仏の声諸共。ひらめく利刃すつぱりと。作十郎か髻際切つたる切先縄もはらり。コリヤお手がそれたのか。どふ有ても助けぬと。唐橋めがけ数兵衛か。切込隙も新身の刀。後げさにどつざりと。切捨給ふ御手の内人々驚ク計也。

ヤア騒クな旁。高知をも足りとせず。強欲非道の学太郎に。追従諂ふ人ン非人。家中の見せしめ身が手討。又作十郎か首は此髻。切取たれば禿の縁。某を欺んと及ハぬ工は小児の戯。小児なれば成長迄。罪を赦か国家の定法。周の穆王寵愛有彼慈童。過て君の枕を越る其時。群臣(五十二ウ)評義をなし。幼弱成り逆命を助け左迁の身となし給ふ。其後慈童は山路に分ケ入。折しも盛り菊の華に帝の情忘れ得ぬ。四句の文言書印。都の空を明ケ暮に拝して帝長久の念願シをこらせしが。終に仙術を学び得て彭祖とよばれ。七百歳の寿を保し例汝逆も幼弱の。昔の因あんなれば。われ穆王の慈愛にならひ一命を助けたり。作十郎は世を去つて。今の姿は其俣に禿。くと仁愛も深き恵に有がた涙。スリヤ私が本心を。ホ、見拔し故に放埒を。却て加増応せしは。敵に油断をさせん為。又一つには。宝の詮議一途になさば。是ぞ天下の囚人にて。汝が願ひも(五十三オ)むそくならん。夫レ故わざととゞめしぞや。今髻を払ひしは主従の縁断切証拠。出家と成て修行になぞらへ本意を遂よ。コリヤ短慮を出さば御宝を。破脚せんも計れず。サ必々油断なく。兄か教養怠るなと残る方なき情の詞。ハア、心魂に徹する御教訓。ケ程の御恩を顧ぬ。不忠至極の私が一命を助給ふは。エ、広大無辺の御慈悲心。よも此上の有べきやと勿体涙出廻にはたと。身を投ふしにくも。とろくる思ひ也。

漸に涙を払ひ。よしなき歎きは返つて恐し。只今君の給はつたる禿の文字。二つに分て法名を。喝儿と相改。今より後は雲

水のやどり。定めぬ三（五十三ウ）界無庵。名残は尽しおさらばと。お暇申立出るをヤレ待喝兒饒別せん此髻は命毛の無実  
に絶るをとゞめし絆。修行の大願終りなば此髻を添に入。御大イ学の御前において。怨敵退散を修せん時の。降魔の利劍  
を寄進せんと。投やり給ふ黒髪や裁く劍は来国吉。日も吉時吉頃も吉。早出立と出行喝兒。姫も俱にとかけ出るを。折田か  
隔て折も待。又の再会互の胸。明て云れぬ仇討の。門出祝ふも心と心実。武士の。か、み山館を。跡にへ出て行

第七

代をこめて直なるは竹。曲れるは只浅ましき人心。身のたつきこそぜひもなき。（五十四オ）堤の上のみだれ共めんつを其  
俣高枕。誠にくはず貧樂の其日暮しぞ気さんじ也。

藤六は大欠。ア、さつても寝れは寝らるゝ物じや。コリヤじらよ。権よ。もふ起おらんかい。いかにおこしてがない迪。

日の暮るもしらずねつゞけ。但しのせ物でもかこふたか。エ、ごくどうめらて有わいの。エ、鷹めが酔がさめたと思ふて。  
よい口な事ぬかすはい。コリヤヤイこちらがねるには当が有。ナア権よ。ヲ、ソレ。われは知まい。頭かいふには。今  
夜は大仕事か有程に。待て居いといはれたが。モウ来そふな物じやがと。見やる向ふへのつかく頭と見ゆる大男。田舎め  
きたる侍と打連立て出来り。道一はいに立はたかり。（五十四ウ）コリヤく皆の者。云イ付ケ置たもふけ筋。随分ぬかるな  
合点かと。いふに三人ヤコレお頭。シテ其仕事の筋はどんな事でこんすぞいの。イヤ其子細云イ聞さんと。頭巾を取ば松浦  
軍蔵。是なるは平野官兵衛殿といふ身が傍輩。我々が主人はか、み山の分国大道寺学太郎様。其御主人を敵とねらふ唐橋作  
十郎といふやつ。喝兒と改名し六十六部に身をやつし。上方を徘徊する由其喝兒をばらして仕廻ば。ほうびは我レ達が望に

任すと。いへは鳶がア、お氣遣なされますな。ぬかるこつちやござりませぬ。殊に御ほうびと有ば。ナア皆の者。ヲ、テヤ福徳の三年め。随分とがんばりましよ。ホ出かしたく。もし手に余らば此軍（五十五才）蔵。飛道具にてたつた一打。其方共は此辺を心がけ。見付次第にしらすべし早行くと追立やり。

兩人跡を打見やり。官兵衛は差寄て。イヤ何軍蔵殿。学太郎様の仰らるゝは。瀬左衛門を討たる事上聞に達し。室町殿より宝の詮義有ん時。館に有ては事の妨。後日の邪魔と某にお預けなされ。昼夜肌身を放さねば。此義において氣遣イはござらぬ。成程く左様でござる。只心かゝりは喝儿め。こいつを生け置ては夜がねられぬ。早速討取と有て某わざく参りました。いかにも我等迎も御主人の御意を受。此ことく盜賊と姿をやつすも喝儿めをばらさん為。ちと心当も有れば身共は枚方の宿を吟味せん。貴殿は橋本の辺を尋られよ。然らば後刻と兩人は（五十五ウ）左右へ別れ急ぎ行。

跡に孫市小かけを出。ハテ合点の行ぬ。思はず此所へ来かゝつて様子を聞ば。御主人瀬左衛門様の弟子。喝儿と改名し諸国修行に出給ひ。此辺を徘徊なざると今の咄し。扱は兄御の敵を討給はん思し立。エ、忝い。何卒尋お目にかゝり。御勘当御赦免を願ひ。敵討の御供せば武士の本望此上なし。有がたや嬉しやと天にも上る心の悦び。併心へがたきは今の兩人。喝儿様を覗様子。一時も早ふ御目に懸。此事お知らせ申たいが何国を尋てよからふぞ。ヤマア何にもせよこふしては居られぬ。葛葉辺を尋て見んそふじや。くと足も空道を早めて急ぎ行。茂り木や。山郭公鳴音さへ。血をはく思ひ紅梅姫。迷ふ恋路の旅衣（五十六才）きつ、なれにし我夫マを尋行を爰かしこ。したふも人の目せき笠傾く。日影枚方の。堤に暫し休らひ給ひ。

平吾。恋しと思ふ喝几様。いづくにお出遊はすやら。夫婦地位ハルと成し計にて一之夜の枕もかはされず。別れもつらき館騒動の騷動。風の便りを力草。尋したふて来れ共。いつか尋て逢あはれふやら。心細ほそやと計にて打ノル中フシしほれたる御姿。平五も心根いとをしく。俱中にしほる、気を取直し。ハテ扱又しても其様にお歎ななされてはお身の障さばり。御病氣でも起おこつては可愛かわいと思し召。喝几殿。尋る事も叶ひませぬが。エ、お氣遣ななされますな。平五めか付そふキ添そからは。ぜひ一度は尋逢。お手渡し致します。とかういふ内もふ日暮。今宵は枚方じらかたに一宿して明日あした(五十六ウ)は早く津国つぐへと心さし。大坂辺おほさかへを尋て見ん。サア〜お出中と介抱し伴ふ向ふへ非人共。点うなつぎのさばり出。一文取して下あれと。ばら〜と取巻たり。平五は腰に有合す錢取出し投なやれば。鳶ハルが掴んでコリヤ何じや。此様な端錢はしぜにあて当にする者じやない。定まめて路用金ろようぎんずつしりと持て居よ夫しを爰へまさ出せ。ヲ、ソレ。こふ見た所げんごが幻妻げんさいもよつ程まぶな代物。着はつた物を引ばいで。胴たうがらは新町へ捨売すてにしても百両はぶら〜。何とうまい仕事じやないかい。ム、扱は儕等おのれらは盜賊たうさくな。命知すのうづ虫め指でもさ、ば撫切なと。姫シをかこふて身がまへたり。

イヤモどふで素手すてでは行おるまいとてん手てんてに割木わりきま横よこざつば。打かくるをしつかと留とど。足弱あしよわを御供ごこうとこらへて居れば(五十七オ)付上り。様々さまざまのほど伝業でんごう。イヤ申お姫様。此先こゝキの宿しゆく迄いたいてお待遊まちあそばせ。サ、早はやふ〜に姫君ひめぎみは提ひ伝つひを逃給にがまふ。シヤちよございなと振放かばなし。又打かゝるを引摺ひきずんで獨投ひとりな。三人一度に立かゝる。性しやうこりもなき非人共。此世このよの暇取ひませんとずはと引ひキ拔太刀風はつたてかぜに。皆蜘蛛みなくまの子このちり〜に。跡あとをも見みずして逃にて行。

後のちに窺うかがふ軍蔵ぐんざうが油断見あぶらすまし切付きりれば。うんと倒たる、折田平五せつだへいご。只一討ただひとと振上ある。脇腹わきはら足あしにて踏ふのめされ。たちろく内に

起上り互に。秘術をへ尽せしが。

折田は劍太刀に急所を切れ死物狂の働きに。軍蔵も持あつかい叶ハぬ赦せといつさんばしり。エ、残念やぜひもなや。喝  
儿殿に尋逢。姫君を手渡シし。宝の行多も俱々に詮（五十七ウ）義せんと思ひしに。何事も水の泡。申姫君様。私が打果な  
ば誰ロカかはつて御介抱。御先途を見届ん。お名残惜やといふ声も次第く切果て。もろくも息はたへにけり。

尋入ル仏の御法夜ルの道。踏分歩ム五月闇。諸国修行の僧侶の旅。笈仏背負かねの音も。いとしんくと物凄杖方。堤に差  
か、れば。襟元ぞつと胸ナさはぎ。ハテ心得ずと気配り目配り。窺ふ足元躓く死がい。エ、むごたらしう切おつた。扱は  
旅人の路用を宛に追剥共の所為ならん。非業に死スれば尽未来。うらむ期なしとの経説は不便の者の有様と。我を尋る人  
ぞ共。しらぬが仏の名号を手向てこそは行過る。

向ふへつくく以前の非人。隠れど道に立ふさかり。ヤコレ修行者。（五十八オ）報謝がほしい。く下あれと。いがみ  
か、れど喝儿は。わざと詞を和らげて。人に物を乞各も此身も同シ修行の身。路用逆はかつてなし。道をひらいて通され  
よと。いへば鳶がそふはならぬ。我が体の其内に大事の物か有筈じや。夫レを仲間へ報謝にもらはふ。ア、イヤ一笈一鉢  
の外逆は何貯なき優婆塞に。望ム施行は。命がほしい。何が何と。ヲ、侍衆に頼まれ。とふから爰にはつて居た。喝儿  
とやらいふ六部。爰へうせたは百年め。ぶち殺してほうびにする。皆合点かといふより早く右往左往に取巻は。心へ修杖  
ではつしはし。手練の手並なき立れば。踏ちらしたる砂煙ふすばかりかへるごまの灰。ばつと一度に逃ちつたり。

従者に隙づいへ宿有方へ（五十八ウ）急がんと。笈をゆり上ゆうくとあゆむ膝口どつさりと。響く鉄炮火薬うんと計り

に倒伏。

仕済したりと稲むらをぬつと出たる軍蔵が。傍り見廻しほくそづき。儘に手ごたへよい死さま。喝儿さへぶち殺せば若殿の

禍は。根をたつて葉を枯す御ほうひは宝の山。イテ此通注進と飛がごとくにかけり行。次第に更る。月影も。傾く運の

姫君は。折田を尋爰かしこ怪しや伏たる其姿。こはくながら立寄て。すかし窺ふ月明り。尽せぬ夫婦が二世の縁。能々見

れば。ヤア喝儿様。我夫と。呼どこたへもあらざれば。詮方かたへに有合す。水の溜を救い上口に含んで抱おこし。一滴う

るをす喝儿が。息吹かへすを抱しめ。コレ申喝儿様。気を儘に持(五十九オ)て下さんせ紅梅姫でござんすと。呼はる声の

聞へてや。苦しき息をほつとつき。エ、たばかられしか口惜や。非人共と思ひの外。飛道具にてだまし打。扱は敵の廻し者。

たとへ此俵死る共。魂此土にとまつて。兄の敵我身の仇。儕はらさでおこふかと。立んとすれと火薬の痛詮方なくも

見へにけり。姫は有ルにも有ラれぬ思ひ。折角尋逢ながら此様にむごたらしう。何者かだまし討。お前に別れ自は何と成ふ

ぞ悲しやと取付絶り泣給ふ心の内ぞいたはしき。

作十郎も尽せぬ涙。女の身にてはるくとしたひ給はる心ざし。嬉しいぞや忝い。勿体なくも御主人の。おゆるし受たる縁

なれば。死でもかはらぬ(五十九ウ)契りぞと。いへ共いた手の苦しみに又も哀を。そへにけり。

非人がしらせに平野官兵衛。大たら横たへのさばり出。作十郎久しいな。平野官兵衛見忘れはせまいな。儕レト人と思ひの

外ぬれ手で粟の紅梅姫。かういふ形て徘徊するも。儕レをばらせと主人の御意。軍蔵が鉄炮でくたばつたと。思ひの外の

死損い。トリヤ是からおれが一料理。不便ながらと立かゝる。かよはき姫も一生懸命。用意の懐剣抜放し。官兵衛目がけ



突かゝるを。引はづしてしつかと取。エ、ちよございなげんさいめ。学太郎様へ連でいて。土産にせんと思ふたが。喝儿めがくたばつたら。うぬも生きては居おるまい。逆もの事の世話次手。われ(六十オ)から先へやつてやると刃物もぎ取只一つき。むざんといふも愚也。

喝儿は身をあせり。かゝるうきめは天道も。神仏にも捨られしが。エ、能武運に尽果しと怒の涙血をそぎ落して流れて。枚方の堤も。染る計也。

ハ、ハ、ハ、ヲ、無御無念にござりやしよ。御尤でござりやすく。ハ、ハ、ハ、ヤイ喝儿。もふ諦め。譬体は自由でも某に手向ひならぬ。と云フはコ、ハ、ハ、ハ、是じや。瀬左衛門が預りおりし此一軸。手向ひなきは只一裂。但し手向ひして見るか。サア夫は。サ、ハ、ハ、けちぶといやつ。此ぎまで。念仏成と題目成と。うぬが勝手にこつき出せ。夫れからおらが御引導。未来の為のおがみ討。まつ此様にと抜刀。既に危き折(六十ウ)から。始終立聞孫市が憎き敵の荷担人めと。刃尖に切付れば。コハ叶はじと逃行を。飛か、つて大けさ切。

其俣立寄手拭。疵口しつかと抱おこし。コ申。作十郎様。田代孫市でござります。作十郎様。お心慥にくと。いふに喝儿力を得。危所へかけ付し不思議の対面悦ばしやとにじり寄て死骸の懐。取出す一軸押載き。エ、有がたし。此一軸手に入からは。兄が恨をはらさんは瞬内。とはいへむざんの紅梅姫。我れ故かゝるはかなき最期。いたはしきよと悔泣。孫市も拳を握り。エ、今一足早くは。ナ斯御最期も有まじと先非をくいし。無念の涙。や、有て両手をつき。今日おまへ(六十一オ)様マの様ヲ子を承ハリ。方々と尋しに。逢奉るも三世の縁。御主人瀬左衛門様。先キ達て人手にかゝり御最期と。

聞より直様すくさまかけ付て御無念のはらさんと。思へどかひなき勘氣の身。あなたに逢しは拙者が仕合せ。何とぞ御勘氣御赦免しやめん下され敵討の御供に召連られて下さらば。生々しやうじやく世々の御厚恩スエと涙と共に願ねがふにぞ。実理ハレゴトりと喝くわ兒もくねんも黙然もくねんとして居すまたりしが。兄上にいじやうの勘当。私には赦されねど。正しく一軸手に入しも。其方が働はたらきなれば。一つの功こうも立たる道理。兄尊靈そんれいに成かはり。勘当赦して敵討の。助太刀に召連ん。ハア、有がたし忝へんし。此上は片時へんも我住家へ御供し。(六十一ウ)疵養生きうじやうが肝要かんじやうと。姫君ひめぎみの御死ごしがい。笈うにうつし入いれまいらせ。背せなにしつかと御手を取とり、せ給たまへと。す、むれど。二足三足ふたあしさんあしたちくく。肩かたにしつかと助ヶ行忠と孝との道直みちなに川浪かみなみ。近ちかき枚方はひの堤つち。伝つたひにへ剽行せうぎやう

## 第八

住吉すまぎの岸かたによる波夜なみよルルさへや昼ひるは。殊ことさら参詣まきんぎの足並あしなみ。しげき鳥居前とりいさへ。弱じやくりやう柳成ぬ。並木なみきの松まつ。金花きんがの獵酒りやくしゆ引かへて。汲くみで差出さしだす。香かうせんのはつと匂におし。髭ひげの香かうは爰こゝら。名代なしろの茶店ちあんでんか、と、やせんべい竹馬たけうまは。子供こども愛相あいさうの土産物みやげもの。茶ちやわん片手ぺんてに庄屋ぢやうや権蔵ごんざう。ナントマア内義うちぎ様。ゑらい参りでごんすのふ。ハイけふは卯うの日の御神事故ごしんじこ。おまへ方も定さだめて御参詣ごまきんぎ。アイヤく。(六十二オ)こちとらは大事だいじの用。爰こゝらあたりに隠かくレのない。鉄挺てつてい伴七ばんしちのいがみ者もの。牢舎らうやを赦ゆるす此所こゝへけふ出ませいと。お代官しろくわん様の云い付けカ。あんな悪あくイヤつは。逆さかもの事ことにもふ二三百年さんねん牢らうに置おけて下くださると。孫子まごの代迄しろ。世話せわがやけぬといふ様な。ナント理り屈くつじや有あまいかと。尤なほそふな庄ぢやうや殿とのの咄はなしも笑わらひの折をからに。縄なは付け先まへにあゆませて。所ところの代官しろくわん堀口ほりぐち曾平そうへい。鳥居とりいのこなたに引ひすへさせ。其身そのみは床とこ几ぎに腰打こしうちかけ。安立町やすたちの庄屋ぢやうや年寄ねんよ。出ませい早はやくにそりやお召めいと。庄屋ぢやうやを先まへにどやくと。土辺つちべに這出こ出で。畏こる。堀口ほりぐち曾平そうへい詞ことばを正ただし。是こゝなる鉄挺てつてい伴七ばんしち事こと。去年こゝねん九月十三日きゅうがつじゅうさんにち。堺乳守さかいちちりの廊くろはにおいて口論こうろん致いたし

剩へ。相手に手疵をおふせし(六十二ウ)科。入牢仰付る、所相手方疵平癒。去ルによつて命を助ケ。此所にて追放仰付  
 らる、。有難ク存しませい。猶又来る廿八日。御当社神田の御田植。御神水をこめ置る、浅沢沼は。其むかし海中より顕は  
 れし。万年功ふる緑毛の亀の背に。天平宝字の四字有。是を即年ノ号とし。時の帝勅有て。亀は則浅沢に放ち給ふ。  
 夫レより浅沢一町四面は禁断の場所と成。別ツして当年は早魃なれば。神水の御用旁。番等きびしく申付きつと怠りなき  
 様と。云付る事云渡し。繩をとかせて堀口曾平元ト来し道へ帰らる、。  
 跡打見やつて庄屋権蔵。何の事じや。アノ代官もよつ程のあほうじやはいの。われがいふ事計いふて。とんとおれに生うつ  
 しじやハ、、、。ア、又(六十三オ)庄屋殿のひよこすかと。何をいはつしやるぞいの。イヤ何にも云ぬがコリヤ伴七。  
 われマア一村のたばねもする此庄屋を。くらざいでまかした報ひ。何シと思ひ当つたか。イヤモ去年から段々と御苦労かけ  
 ました。モウく行所じやごんせぬ。ヲ、夫レで思ひしれよ。イヤコレ皆の衆。伴七に道で髪月代。着物もきせかへ早ふ連  
 ていんで下され。おれは又跡からいぬ。心得あるき組の者。伴七伴ひ行過る。  
 見送る庄屋が独言。ヤレく世話が又ふへたは。扱是からは浅沢の。番云付ざなるまいと。つぶやく後へ。高砂や。此浦  
 舟に帆を上て月諸共に出汐の。付なやいく。一文とらして下されと。いふ顔つくく。ヤアわりや孫市が所の坊(六十三  
 ウ)主じやないか。おまへは庄やおち様かと。いふに恠り次左衛門。ナニお庄や様と逃出すを。ア、コレくくだんな  
 いく。思ひがけない此形は。ア、いとしやきつうこなたせつないの。其以前は扶持も取た神辺の何某。質の流れと人の行  
 ぶ。ア、哀はかなき有さまと。ほろりとこぼす一雫。次左衛門も涙を払ひ。面目もない御対面。いつぞやよりの眼病より。

芸道修行も叶ひませず。御大家より拝領の。時服巻物一つ売。二つの眼の良薬に貯尽。夫婦の者がさまぐと。なれぬ手業の苦しみより。人參代と薬札に。貧の病イは次第に重る。あまり見る目のいちらしく。せめて二人が手助けと。(六十才) 覚へ込だる音曲も。昔は高家のお耳にふれ。御意に叶ひし舞うたひ。乞食非人同然の。身と成果し有さまを。推量有と計にて。むせび入たる悔事。聞て庄屋も投首し。涙を鼻に紛らして。ヲ、尤じやく。併恥じる事はない。世のたとへにもいふ通り。泣ク子も目明といふからは。精出して泣たらば。泣親仁の目の明事も有ぞいの。爰に少々端錢。悔リがましい事なれど。だんなか是なくおまそかと。差出せば両手に受。コレハく忝い。御辞退申は却て不礼有がたふござります。シタカ申お庄屋様。かうした形で出ます事他人へ元より娘にも。必共に御さたなし。そりやおれも合点カ。在所の者の目にか、れば。孫市が顔も立ぬ。(六十四ウ) サアく早ふ逝しやれ。然らばお別れ申ましよと。杖を力に立上り。孫よ手を引。地を走。獣空をかける翅迄。子故には。涙の霞はれやらず。とほくとして立帰る。ア、コリヤく坊主よ。脇目せずと手を引て行よ。ア、可愛やと。うつむく足元落たるは。鼻紙入と手に取上。コリヤコレ大方今のやつらが落した物。テモ鹿相など云つ、明て取出す文。エ何じや助さままいる御存よりとは畜生め。エ、此一包は佐々木の定紋四つ目の印。ハ、ア長命丸とはテモマ好きなやつ。コリヤ何じや。守宮の黒焼惣薬。コイツハとほうとてつもない物が手に入たわい。日頃なびかぬ美婦人に。ちよひとふりかけしめるとは。うまいはくく。しめたはくく。(六十五才) アイヤくく。とはいふ物の此薬。きくかきかぬか試してみたい物しやが。エ、コレマ誰ぞこよかし。ふりかけたやと見やる向ふへ。しやなくとつまに。おくれし二つ鬘しらがを隠す黒油。年は五十に四つ五つ。六つかしそふな顔形チ。鳥居の方へとあゆみく

是幸地ウいと権蔵ハルが。行ハルちがひさまきりと袷ウ元へ。ちよいとふりかけせしらぬてい。様子フシいかゞとうかゞへば。こなたの後家地色ウへ二足三  
 足。折ウふし吹は恋風か。ぞつと身の毛も忽たちまちに。首筋元ウからジハくくぞくくく。まはる薬かふのふの功能ハルに。いやな  
 目付に顔打ながめ。ぐにやらくとしたウキひ寄。コレ権蔵様コしらず顔は見忘コしてか。わたしや宗右衛門が後家のらんでござん  
 する。二世地ハルの夫に（六十五ウ）死別れ。夫地ハルしからかたふ後家立コて。四十五ハルウの秋から。ア、ソレ六七八九五十一二三ヲ、丸八  
 年。九年地ハルサリごしに男もなく。それを自慢ハルじやなければ共。祝ウふとつたが目に付色ぬか。腎薬じんやくも練薬ねりも鍼はりもあんなまいらばこそ。命ハル  
 につないで適なま々に逢あつたこな様に惚色るとは。ヲヤ馬鹿ウらしいとふせふいな。惚ウか、つて居る此後家コじや。コレ承知ハルしやといふ  
 て下下さんせ。エ、心カンわるやどふぞいなと。べつたりひつたりぬれかゝる。膝ひんきんにとつさりふご尻しんは恋ハルの。おもにといふや  
 らん。庄屋地色ハルも心はだくつけど。わざとすげなく突放色し。其志は嬉しいが。おれは定まるか、も有。又爰は往来人ハルも見ハルる。イ  
 やもふおさらばと立地ウかゝる。後家ハルは驚ハルき引とゞめエ、庄色や。胴欲たうよく（六十六オ）や情中なや。たとへ野の中道サハリのはたどんな所も。  
 苦中にせまい。かはゆふてく人の見るハのも構中やせぬ。コレナ叶ナへてくと放フシす気色フシは見ハへざりける。ヲ、其胸中けうちうを聞ハからは。  
 何いなの否いなと云ハふぞいの。カおのれはちつと用も有。そもじは新家しんけの丸ハやへ往酒いせきでも呑ハんで待ハて居ハや。ヲ、そんなら先へ行程  
 に。必違ハへて下下さんすなど。庄地色ハルやを尻目しんめにひよくと。悦ウぶ足も地ハに付フシず丸屋丸屋をさして急ハぎ行ハ。  
 跡地ウに庄ハやが喜き悦えつの眉まゆ。サテ先首尾しんじゅびはよしト。今一所コにいては余ンり手ハがない故。先へやつたは口舌くせつのこんたん。ハテ何地ウをがな  
 とさぐる紙入ハル以前の文ハル。ヲツト有コぞく。マ助マさままいるはさいて捨ハ。扱ハずつといて座敷ハへ通り。ヲ、嘸待ハたで有ハふのと

(六十六ウ) 声かける。ト後家がツンと背けて居るは所で色男の氣取で。ホ何が氣に入ぬやらきついおもたせ。ドリヤお暇とトシくくくト出かけるは。時に後印めが。バタくくくくと飛かゝつて。胸づくしをト取て。コレお待。イヤ待しやんせ。そこへ行と待して置てもふ何時。どこに何して居やしやんした。イヤ何もしては居らぬが。ちつと用が。サ其用は何の用じやいひなはれ。イヤサ其用は。サア夫は。サア。くくくといふ拍子に此文がばつたり。ソレ其文あやしい見せなはれ。イヤコリヤ見せられぬ。イヤ見にやならぬと掴み付。イヤ見る。見せぬくく。コリヤ放せ。イヤく放さぬくく。捻合引合引やぶる。アイタ、コリヤつめるな。イタイハくく。又かみ付。アイタくく。こそぐるハ、。 (六十七オ) 吸付。引付。抱付。ハ、。と口舌の段を一人して。早がはりやら作者やら。もてるくと飛び。踊つはねつ悦びは。仏の甘露にうるほひて。女性承知とうかれしも。是にはいかで増るべき。

折から来ける下男。申く庄や様。後家様がお待なされてござりますと。半分聞てヲ、そこへ。くくとの返事より。使を跡に氣は先へ。夢中に成て。かけり行。新家の方よりとつばかは。かざす扇の日かげさへ。七つと六つの時左海。泰庵が向ふより。留戻りに孫一か。夫と見るより歩み寄。コレハく泰庵様。毎日く御苦労様と。挨拶すればこなたも立寄。ヲ、孫市殿。今そちへも見舞たが。扱御病人危いはい。立ながらも咄されまい。マアく (六十七ウ) 爰へと傍へに蹲踞。孫市迎りに心を付。先達てあなた様か。仰られし百段の血汐も九十九品迄調ひました。が今一色か。オ、ソリヤ調ひにくい筈。万年功ふる龜といふは此広い日本に浅沢へ放されし。緑毛より外にはない。スリヤアノ浅沢の龜が。サイノ鼻の先に有なから。其浅沢は禁断所。足踏すれば忽罪に行はる、国の掟。とはいへもしも天道の恵で。龜の生血が手に入事も有ふ

なら。夫レをまじへる妙薬は。何時成共取にござれ。愚弄は病架へ心もせけば。委しい事は又明日。孫一さらばとぞ、くさ坊主。病架をさして急キ行。

孫一はつくくと。左海が咄しの妙薬は。調ひがたき珍龜の噂。いか、はせんと手を拱き(六十八オ) 思案途方に暮レ居たる。様子とつくと聞すまし。後へぬつと鉄梃伴七。孫市見るより。ヲ、コレハく中在家の伴七殿。こな様シも何とやら。不時な様子を聞ましたが。無事で戻つて目出たふござる。段々恩義の有こなた。女夫の者が云イ出して。いかふ案じて居ましたと皆迄聞す。コリヤく孫市。其追従は聞たふない。おれか牢へかまらぬ先に。わいら女夫に貸付た十五両の。金か戻してほしい。どふやらこふやら助つても。一文なしの此伴七。サア今戻せ請取ふと。いがみか、れば。サ、尤々早速返済したけれど。知ての通のおれが身代。逆もの事に今暫らく。アイヤワリヤ待まい物でもないが。いふ何日には返すといふ慥な証文を書か。ソリヤ書ませふが爰に硯が。有共く。(六十八ウ) 文言に望か有案紙も認、持て来たと。懐より取出す一通。腰の矢立に紙取揃へ孫一が前に差置は。手に取て読内も。ふしぎそふにコレ伴七。先達て借ツたは十五両。此案紙には五十両。殊に又十日を限。返済延引するならば。女房鶴を其方へ。渡さふといふ此文言。おりや此様な証文は。マア得せまいとむつと顔。伴七はすり寄て。ハテ扱夫レは悪い合点。譬何と書ふ共。貸たおれか得心で。十日の内に戻しやるなら。十五両で受取分。もし日限が過たなら。利に利をもつて五十両。内義の事も何もかもコレ本の表向。追て書事がいやならば。直に爰から代官所。殊に内には人にしらすぬ大事の病人も有そふな。事によつたら盲の親仁。女房子まで路頭に(六十九オ)に立ねばならぬぞよ。思案して見い孫市と。よはみへ付込厄病の。神様がふと知れけり無念ながらも孫一は。お主の

身の上しられては。尽せし忠義も水のあは。ぜひなき事と胸を極め。矢立の筆にさらくと。書認めてサア伴七。是でこなたの云分ないか。ヲ書判なれど我レが直キ筆。ム、是でよいくしつかりと請取たそんなら伴七ヲ、十日の内に必行ぞやと。詞つぶて孫市は。別れてこそは行跡に。

伴七は一念々。ハ、ハ、ハ、どふやらこふやら女房を。書入さした此証文。殊にあいつが最前からやぶ医めとの咄し合。お主といふはかの喝儿。龜は浅沢禁断所。こいつをか、つとに点。うまいくと尻引からけ。浅沢さしてへ走行。

往昔聖武天皇の御宇。海内より緑毛の靈龜(六十九ウ)を献ず。背に天平宝字の文字有を以時の年号と改。則龜は此地へ放ち給ひ。殺生禁制の高札立幾年。月を重ねけり。早日も暮て。人顔も見へぬを幸孫市は。顯かぶりに顔かくし走。付たる浅沢の。沼の辺りに息をつき。ハ、ア嬉しや忝や。禁断の場所ならては無妙薬と泰庵老の物語に。まんまと忍び来りしが。いづくに有共分らねど。唐土の王祥は氷の魚を取得たる。其孝心には劣る共。我忠心を天道も憐有て緑毛の。龜を得させてたび給へと。一心むがの合掌は。神も納受有ぬらん。

殺生界をいましめの。人を隔の杜若。ありと分ぬ五月闇。一夜のてらす数万の螢。沼の表も有くと見ゆるを心の当にて。深みへこそは飛入たり。忠義一途の孫市が。漸得たる(七十オ)件の靈龜。サア仕おふせし有がたやと。天にも上る心地にてかけ行首筋引戻し。立ふさがりて鉄挺伴七。ヤア待孫市。禁断の場所へ這入し曲者。引く、つて手柄にする。覚悟ひろげと云せも立ず。大事を知らるうぬめから。仕廻てくれんと立かゝる。手練は得たれど無刀のあしらひ。こなたは無法のがむしや者組ところんず双方が。爰をせんど、争ふたり。



かゝる所へ代官曾平。丑六か訴人によつて家来引連出来たり。上意く追取巻。声に驚つたるみを見て。ソレとかけ声家来も俱におり重つて孫市を。からめ取て引立れば。

丑六はしやくり出。はつとを破りし大罪人。訴人したは此兩人御ほうび願イ奉ると。いふに代官出かしたく。ほうびは追て御沙汰有ん。先科人を引立よと。下知にゑつほの伴七うし六。(七十ウ)羊のあゆみ孫市は引れ行こそへ是非もなき

第九

和泉路や。遠里に野は。名のみにて。今人里に立つ。安立町の其中に。分けて貧家の店さきに。へちま瓢箪ぶらくと。実商売は草の種。とうがらしの粉盛たるは。辛き世帯の印かや。

世帯の味はまだしらぬ。岸野に姫松。高州や幾世がいそくと。ノフお鶴さま。毎年五月の廿八日は住吉様の御田迎。乳守の廓の女郎衆に。田植さすのを嘉例とは。物好きな神様ではないかいな。私らが植付けた米でなければ上らぬとは。ほんに好た神様しやと。いへはお鶴はヲ、ソレく。此役を勤るは女郎の手柄。わたしも前方勤メたが嬉しい事でござんした。幾世さまは強き好無嬉しからふな。ヲ嬉しい所か常々は。気候に出入(七十一オ)れぬ廓の内。此早乙女を勤るので。適々外を見るのでな。モ気かはれてとんとうさを忘れたはいな。ホンニ其忘れた次手。あすのはれにと精出した田植の惣ざらへ見て下さんせと立上り。かりに扇の筭を。早苗かわりと植付の。拍子も揃ふ田植哥。爰は津の国。ヤンレ住吉の。神の御田を植ふなら。天津御空はヤンレ長かれよ。地も又久しと寿て。所繁盛と栄へはびこる神の御田を植ふよ。ヲ、けふとうよ揃ふた。請合できつと当るはいな。当るとはヲ、嬉しと。心うきくうかれ女が。三人寄ればかましい。

折地色ウに来ける左海泰庵。おつる見るより。コレハく御苦勞様。病人もお待申て居られますれば。あれへお通り下さりませ。左様ならばゆるさつしやれと泰庵地ウは。病架へ通れば姫松色が。ヲ、わたしらとした事が。御病人が有そふなに。やかましうござん七十一ウせふ。サア皆様是から神事しんじの始る迄神主様かんぬしで待合さふ。お鶴さまいてこふ。ヲ、又あす戻りにお寄。おさらばと打連つらてこそ出て行。

泰庵地色ウより屈託くつたく顔。コレ内義こまつた物じや。始メからいふ通り。つうれいの葉ではき、めはない。とかく頼はかの一味の妙薬。其一品が調とくのはいでは所詮しよせん助らぬ奥の病人。殊に大望たいぼう有お人と聞て。とふぞしてと思へ共。せふ事がない。随分と氣を付たがよいぞや。お暇申と泰庵が出るを俱に女房が。門送りする向ふより。名さへ鉄挺てつてい伴七迎。所へんで名うてのいがみ者。女の好ぬ形顔フシ。コレお鶴。ア、いつ見てもく美うつくしい者じやな。此様な女房持ながら。不了れうけん簡な男でござるはい。何と物は相談。云へぬ事は分らんが。此様うそきたない。むさくろしい。不自由なくらしせふよりは。此伴七様の奥様に成と。第一金が沢山たぐん（七十二オ）で。思物は何でも望次第。ヨシは承知ぞちか。男がよい迎喰むくる物ではない。程に。ノヨシカ承知か。承知して相談してみる気はないか。どふじや。承知か。くと。しなだれか、れば。お鶴地色ハルはむつと突退色て。伴七様。わたしや金には惚ませぬ。好た男と暮すのが。楽しみでござんする。又してもく女房になれの何の迎。あたしつこい。廊に居た時とは違イます。孫一殿といふ男の有身。重ねていふて下さんすなど。あいそ内義の腹立顔地ハル。伴七色はほくそづき。コレお鶴。何ほ其様にひこしやことしやつても。孫一と相対で借してやつた五十両。日数十日限に戻さねば。そなたはおれが女房にする約束。エ、何と云ハしやんす。大まい五十両という金。こちの人はいつからしやんしたへ。ヲ、貸したといふは此証文。

金子五十両也。日数十日を限返濟致すべく候。もし延引(七十二ウ)致し候は、女房お鶴を遣はすべし。との此文言。コリヤコレ孫一が手じや。何と覺エが有ふがと。差出せば押開キ。見れば覺の夫の手跡。ハタはつと計に当惑の。何と返事もないじやぐり。ナントようした物で有ふがの。又此金を戻すまいといふがさいご。孫一がか、もふて居る。兄を討タれた腰拔。引ずつていてほうびの金。コリヤ驚くな。伴七は見通し。何もかもよふ知て居なさるよ。夫レがいやなら五十両。コレお鶴どふじやぐ。女房に成てたもるか。但し腰拔を引出そか。サアぐ。どふじやぐと。せめ付られ。思案しがくの金事は。俣ならぬこそぜひもなき。

折から表へ所の庄屋。氣の毒顔に内に入。コレお内義。禁断の場所へ這入た科で孫市が牢舎。どふで命も有まいが。せめて金の五十両(七十三オ)も有ば。首代でも願ふて見よ。なれ共。何をいふても埒明ぬ。が、うは云フ物の。親仁殿共相談しや。所の名物瓢箪から。金が出まい物でもないといふはのしほ。首かたふけ帰りける。跡見送つて女房は。こりやまあとふしてよからふと案じに。胸も落付ず。余所の歎きを考へてた、りに廻る神様かぶ。鬼門の丑六象身の万八時分はよしと門口から。伴七爰にいやるか。おいらが兼て頼まれて居る。大金に成代物。爰らあたりに埋んで有様子。サ、無代物も大方まふと奥の方。尻目にかける伴七か。三人寄ば文殊でも。及ばぬ智慧の悪者仲間。象身はお鶴が鼻の先。ヤコレおかみ様。爰の孫市も。禁断所へ這入た科で。むし(七十三ウ)にかまり難義でごんしよ。ヤほんに鉄挺よ。きのふも。代官所へいたれば。孫一がごされて居る最中。ホンニく目当て見られる物じやないわいと。いふに伴七、そふで有。ソシテマア何貫で有たぞい。ヲ、しかも天秤。ハア其天秤責。ついに見た事がない。どふいふ責じや咄して聞しや。ヨアノわれが天秤しら

ぬとは。コイツハ大笑ひじや。知らずは咄して聞さふ。相人が入。コリヤ鬼門よ。われちよつと孫市に成て呉。ア、イヤ〜〜〜気味の悪い。赦してくれ。否じや〜も聞ばこそ。有合細引幸と。鬼門をかりの科人に。帯から通してそつとしめ。縄先鴨居へ打こして。コリヤ鉄槌。此細引を持って居て。おれが口上に合して引上い。合点か。ヲ、合点じや〜。コレおかみ様〜。おまへの殿御（七十四オ）のお姿は。マアこんな物じや。東西〜〜。扱お目通りにしはり置ましたるは。此度始メての科人。孫一が像でござりますじり〜と引上ますれば。五体のおもみ繩のしまり。次第〜に苦しみまする体。所々は口上を持まして申上ます。こなたの繩を引ますが。発端でござります。サテ〜〜〜中程に至つてはあちらへぶらり。こちらへぶらり。〜〜とはねます。此義名付て水汲の。釣瓶の形でござります。サテ〜〜〜。ヤレサテ。コレハイサテ。トツコイサテ。おつとそこらでとまるのが。お寺の堂に釣て有。鉄燈籠でござります。サテ〜〜〜頂上へぐつと引上しめますれば。あんまり苦しみ目口から。流る、所は龍門の。血は瀧津瀬でござります。東西此義も首尾よく相勤（七十四ウ）ますれば。先々様は入かはり。先こなたへ逆落し。コリヤ〜〜御ほうびに一番誉たりハ、〜。間度々に女房が。胸も張さくうき思ひ顔を。背けて泣計。伴七も打しほれ。ア、扱も〜いぢらしい咄を聞て。思はずしらず涙がこぼれる。コレお鶴。悲しいは道理〜。男は当つて碎ケ。悪クに強いは善にもつよい。おれも向後心を入かへ。本心に立返る。かした金も入らぬ。わがみの事も思ひ切。孫一を助てやる。是必気をもんで癩おこしてたもんなやと真実見へし。涙声。エ、何と云ハしやんす。孫市殿を助けてやる。ソリヤマア本でござんすか。ヲ、本共〜。其助ケるといふは此証文。是へ親仁の判をして。そなたの身を売。其金で孫市を助る。コリヤ世間に何ぼも有事じや。（七

十五才) 夫の爲お主の爲。外でもない元の乳守。高で一年半の辛抱じや。どふぞ孫市を助けてたも。ほんにやれく今この咄しを聞ては。他人のわしさへ。ほんに身も世もあられぬと。いふに遣は女氣のたまさるゝとは露しらず。何の思案も有ぼこそ。あたふた明る張箱の。判取出し手に渡し。コレ伴七様。段々のお世は。死でも忘れは置ませぬ。一時も早ふ孫一殿が助ケたい。と、様へ知ラせては隙が入。金もおまへが請取て。早ふ助けて下さんせ。皆様も俱々にと。涙かくして手を合せ。頼むあいその笑顔にはいかな鬼でも鉄棒を取落すべき風情也。

伴七印形取認。一時も早ふ戻してやらふ。必頼みまするぞへ。ヲ、合点じやく。象も鬼門もサアこいと。(七十五ウ)

三人打連門に出。二人ながら大義。まんまと首尾よふ。コリヤ。親方に金請取。祝ひ事に吞かけふサアこい。くと三人は伴ひへてこそ出て行。

世を悔み身のうき忍ぶあみ笠に。昔は神辺何某と脇の見る目も恥しく孫を。ツレ共シテ柱。並木の松を橋が、り。切幕ならぬ破暖簾。とほく帰る門の口。夫とみるより。ヲ、と、様戻らしやんしたか。嘸草臥でござんせふ。伊之介もしんどかろ。イエ。わしはしんどい事はない。よふあるくといふて。祖父様に是を買て貰ふたと。見せれば手に取。ヲ、こりや持遊びの土の塔。と、様もあまやかした此様な物持て遊ぶ年かいナ。イヤく余所の子と違ふて。中々おとなしい坊主めと。孫(七十六才)にはいと目のない祖父。帰られしかと一間の障子。聞く武運は尽果て行歩。叶はぬ喝儿が。病勞れたる其有様。次左衛門手をつかへ。今日は御病氣御平愈の願こめに。大寺から万代の八幡へ参詣を任り。只今下向致しました。是はく老足といひ殊に眼病見る影もない某を。躰の縁逆親子共。様々の心遣ひ。過分至極と計にて打しほるれば。是は又

改つたお札。髻孫市が三代相恩の御主人。スリヤ私共か為にも。大事のくお主様。御家来の我々へ御遠慮は御無用く。  
ヲ、ソレくと、様の云へしやんす通り。お心遣いは御病気の障。殊に大望有お身なれば。心で心の御養生が肝心と。お主  
思ひも夫思ふ。御心（七十六ウ）ぞしほらしい。ヲ、実誠。俱に矢の戴ざる兄の敵。大望有身を持って。小事に屈するは  
匹夫の勇。コリヤく伊之介。此中聞た阿漕の語。夫レを心の鬱散と。望嬉しく母の親。祖父も俱々コリヤ伊之介。旦那  
様が謡聞ふと御意なさるゝ。コレくほん随分味よふうたふてたも。アイと行義に畏。廻らぬ舌もいたいいけに。さなき  
だにいせおの海士の罪深き。身をくるしみの海の面。一文取して下さりませ。といふに驚次左衛門。そりや何いふぞ不行義  
など。あせるはづみに袂より悲しや落たる米袋。お鶴は見るより。ア、コレ爺様。お前の袂から。米袋が落た。ア、イ  
ヤソリヤ大寺の仏餉米。買つてくれとの見せ米なれど。ヤモ（七十七オ）米は買へいでも沢山。われも知って居る通り。わし  
が乱舞の弟子衆から。新米でも古米でも望次第。ヤ申。喝儿様にもお心置なく御養生ソレ孫よ旦那様を奥へ連まし猿が嶋の  
敵討咄して御機嫌取ませいが今の様な座興を必云まいぞ。アイと返事も愛らしく奥へ伴ふ御主人を。大事と思ふ稚氣は追  
に武士の胤ぞかし。

跡にはつきほ次左衛門。娘が傍へ膝ずり寄。訊のない子供心にさへ。お主大事と思ふ物。ましてや髻殿忠義一途にこりかた  
まり。此度の入牢も。御病気の妙薬を。取得ん為の憂難義。夫レを隠して。紀州辺へ用事有て参りしと。云いくるめては置  
物の。もしや死罪に極まらばわれから先へ死ヌで有。若き（七十七ウ）を先立どふせふぞ。もし二親に離れたら孫めは何と  
成物ぞ。夫が悲しいくとわつと泣たい。親と子が心を奥の間より。お鶴くと病人の。呼声はつと気を取直し涙隠して。

入にける。

歎地色中きの中中につくハルと思ハルひ。廻ハルらす一思案。孫ハルよ。くハルと呼色出し。コリ詞やよふ聞ハルよ。日頃われは物ハル覚ハルがよふて。むつかしい謡ハルでも。二三辺で覚ハルる利口詞者。今わしがおしへる事ハルを能ハル覚ハルエて。代官様ハルの前ハルでいふとな。強ハルい者ハルじや賢ハルいと人ハルが譽ハルる。

第一と、は戻るし又か、も悦ハルぶ程ハルに。よふ覚ハルていふてくれヨ。アイと、様ハルが戻ハルらしやる事ハルなら。よふ覚ハルエていふ程ハルに其代ハル賃ハルに。今ハル度は土ハルの地蔵ハル様ハル買ハルて下ハルされやとハル仏ハルほしがる稚ハル子は。可愛ハルや虫ハルが知ハルすかと。(七十八才)思ハルへば胸ハル迄ハル突ハルかゝる。涙ハルを吞ハル込ハルくで。ヲハル、そんならよふ覚ハルエよ。かうじや。恐ハルしながら申ハル上ハル候ハル。サアいふて見ハルい。アイ恐ハルしながら申ハル上ハル候ハル。先達ハルて浅ハル沢ハル沼ハル

へ忍ハルび入ハル候ハル者は。く。私ハルにて候ハル間ハル。親孫ハル市ハルを命ハルを助ハルけ。く。私ハルをいか様ハル共御成敗ハル仰ハル付ハルられ下ハルさるべく候ハル。く。御代官ハル様伊之介ハル。く。ヲハル、出ハルかした。くくナア。是程ハル利口ハルな初孫ハルを。祖父ハルが手ハルづから連ハルていて。何ハルと代ハルにやられふぞ。

可愛ハルの者ハルやと抱ハルしめ泣ハル入ハル。く泣ハル沈ハルむ。

合ハル点ハル行ハルねは伊之介ハルは。祖父ハル様何ハルで泣ハルしやると。うろくするに祖父ハルは捨ハル。きへ入ハル思ハルひを喰ハルしハルばり。ヲハル、そふじや。く。小の虫ハルを殺ハルし大事ハルのくハル智ハルの命ハル。幼少ハル成ハルル者ハルの孝ハル心ハル。お聞ハル届ハル有ハルそな物ハル。遅ハルなはりては詮ハルもなし。(七十八ウ)道ハルで。今ハル一度教ハルふと立ハル上ハルれ共ハル。よろく。杖ハルは爰ハルにと伊之介ハルが手ハルに持ハル添ハルユるを力ハル草ハル。代官ハル所ハルへと急ハルキ行ハル。

跡ハルへいハルきせハルき乳守ハルの親方ハル。親仁ハル内に居ハルらるゝかと。声ハルにお鶴ハルが一ハル間ハルを出ハル。ヲハル、コレハく親方ハル様ハル。久ハルしうお目ハルにかハルりませぬ。マア一ハルつハルぶハルくと煙草ハル盆ハル。吸ハル付ハル出すは廓ハルのくせ。子持ハルと見ハルへぬ品形ハルチ。扱ハルお鶴ハル。委細ハルの訳ハルは伴七ハル殿ハルに聞ハルたが。何ハルやら金ハルの

入筋ハルで。か、へてくれと段々ハルの頼ハル。外ハルでもないそなたの事ハル。下地ハルがこちの奉公人ハル。四ハルの五ハルのなしに一年半ハルを五十両ハル。伴七

殿へ金渡し証文も請取た。サア連れて逝ふ用意しや。と粹に似合ぬふきどふは。皆親方のならひかや。  
覚悟しながら今更に。さがる胸を押しづめ。(七十九才) 暫しが内あの納戸で待て居て下さんせ。其間にと、様や。伊之介  
にも暇乞。ヲツト合点。イヤモどの奉公人でも立際に。さつぱりするは一人もない。子供に灸すへる様にいぢむぢいふがお  
定り。幸けふは新家の丸屋で住吉講。是からいて戻りに寄。念シの為じや去状も書して置や。ドリヤいてこふと才兵衛は。  
新家をさして出て行。跡に。しよんぼり羽拔鳥。お鶴は重る物思ひ。かゝる難義に大寺の。無常を告る入相の。かね故又も  
しづむ身は。生死のさかい夫故と心危や角行灯に。ともす光りも幽なる。有かなき身の孫市が。漸戻る我家の軒。お  
鶴。くといふ声は。慥(七十九才) 夫と走寄見るより恟り。ヲ、やつぱり主しや孫市様。よふまあ戻つて下さんした。  
サアく内へと手を取て伴ひ入間も気はいそく。夢ではないか現かとそゞろに悦ぶ妻の顔。見るに満くる涙を隠し。ヲ、  
嬉しいは道理く。ヤモ中々厳しいお上の掟。所詮助らぬ我命と覚悟極めて居た所。庄屋殿の云なしと代官様のお情で。  
思はず命助りしと。聞に飛立嬉しさは。三千本の優曇花を鉢に生けたる心地せり。ヲ、私とした事が余りの嬉しさに飯上る  
のを忘れて居た。嘸ひもしうござんしよ。戻らしやんす知せやら。けふは坊が誕生日。けさ拵へた鯨餅。何はなく共赤の飯。  
祝ふて上れとかい立て。取出す膳も蝶脚の外は禿ても(八十才) 打明て。いはぬ辛勞。黒塗のお櫃取添持て出。サ、目出た  
いく此膳に。焼物のないは気がり。幸の虫の塔夫の前に押直し。お前も覚てござんせふ。私が勘を引時に。別れの膳の  
焼物は。膳をすへるが乳守の掟。夫でけふは改て。此焼物をすへますと。いふに夫はふしん顔コレお鶴。何やら訳の有そ  
ふなそなたの詞。サイナ。別れの膳といふ事いなア。ム、別れの膳といやるのは。ソリヤマア誰に。アイお前に。ヤア。サ



様子は跡で知りませふ。去状書て下さんせ。と聞て弥ふしんはれず。夫には何ぞ様子が有。子細聞ねばいつ迄も。暇やらぬ  
 は男のこうけ。サア〜様子は子細はと。とはれて涙の顔を上。様子といふたら伴七にか、しやんした金の催促。利に利を  
 かけし五十両。(八十ウ)戻さねば私をは。女房にするいやならば。喝儿様を訴人するとの。過引ならぬ手詰の難義。打て  
 かへてのお前の為。夫れ故私は身を売て。元の乳守へ行ます。と聞て夫は詞さへ。胸にせまつてはら〜涙。忠義といふ  
 事ないならば譬親子四人連。手を引合て出る泣も。何の別れふ隙やろふぞ。只何事も約束事。はかない此身と堪忍して。こ  
 らへてくれよ女房と手を合すれば。ア、勿体ない〜。まだ此上に艱難。命のせとに成泣も。夫トの為にはいとひはせ  
 ぬ。二世といふ字に馴初て。殿様といふては一生に。おまへならでと。思ひ詰。心で済す住吉の。おもとの宮は頼込の願ひ。  
 叶ふて漸〜と身俣に成た。嬉しさに。つらい世帯も(八十一オ)苦にならず二人が中の伊之介が。成人するを楽しみに。  
 思ふて暮すかひもなく。二度の勤は情ない。仕様もやうもない事かと夫トの膝に。すがり付声を。忍びのくどき泣。漸に涙  
 をと〜め。ア、歎に限のない物じや。もしもおまへが死しやんせふは。私も生てはおりませぬ。ア、夫を思へばわしや嬉  
 しい。いそ〜いさんで行ます。したが申こちの人。伊之介が虫のおこらぬ様。邪魔で有と朝夕に。丸薬吞して下さんせ。  
 又目の不自由な年寄や。子供か、へてお前の難義。あたふたとして。必。煩ふて下さんすな。毛纒な内の勤奉公。夫れ迄  
 の暇の状。ちよつと書て下さんせと。いふにせひなくかけ硯。引出し明(八十一ウ)て。取出す。神も結ばぬゑにしかとこ  
 ぼす。涙の水入て流れの。苦勞する妻と。思へばいと、。力なき筆の。命毛切果る。妻は貞女の鏡立。誰に見せふ泣  
 の。鬚めほどいてかつ山に。結びがひなき此身やと顔を背ける。忍び泣。

親地ハルの。心を子中はしらず。か、様戻調ったくと。内地ハルへ這入はお鶴色は恠り。ヤア伊之介。わがみはマア寝て居やるかと思ふたにめつそうな。日の暮て有にどこへいきやつた。アイ。わしは祖父ぢい様と連立て。殿様の所へと。御呼にいたけれど。マア先へ逝いぬ。と、様は跡から帰してやると。庄やのおぢ様ンが。あそこ迄連て来て下さつた。か、様わしはねぶたいわいの。寝地ハルさしてほしいと抱付。ヲ、ねふたかろく。ガコレ伊之助六十才。と、様へ戻つてじや嬉しいかと。いふに欠寄色ヤアと、様。逢ウたかつたと取すがる。父も其俣抱色キ上。イヤノウ女房共。喝調儿様にもお目にかゝろが。おれも大きに草臥くたはれた。坊主はおれがねさしてやろと。納戸地ウへ這入後かぎ。見送地ハルる目さへ泣はれて。迎ウの駕の今の間に。行ねばならぬ私が身の上。是ウが別れでござんすと。其俣ウそこにどふと伏身スエテもうく計。泣居中たる。

孫故ウに疇表具ルに迷ふ目なし鳥。戻ナスウるも老の。足フシカ、リ中よは車廻る。因果ウといひながら。立帰ウつて髻や子に。何ウと語り明中さんと。案ウじはぢウに。踏ミ途道さへ躓つまつくしき敷居ハマルにお鶴ハルははつと。どこもお怪けが我がはないかいなど。いたはり起し内色に入。マア悦調ばします（八十ウ）事ウが有。孫市殿が戻られました。早ふ逢て下さんせ。ヲ、成程。孫市は戻る筈ウじやく。其戻ウつたに付て云ハねば成ぬ事が有。必恠り仕しやんなや。其髻を助ふ為可愛や孫は死だはやい。エ、つんともふ何を云ハしやんすやら。と、様お前はマア気が上りはせんかへ。ヲ、合点が行まい尤もじやく。我レにしたら大抵ていでは得心とくしんせまいと。孫めにとつくり云い聞せ。庄や殿を頼んで命乞。孫を代に立たればこそ髻殿が戻られた。死罪しぞ極マる科人を。何の其俣返地ハルさふぞと。いふて泣出す爺親てより。娘ウは一ツ向合点かう行調ず。コレと、様。もそつと先伊之介は戻つて来て。孫市殿と一所に。奥に寝て居ますはい（八十三才）なア。ヤア何じや孫は戻つて居る。南無あみたくと。ア扱地ハルは子心にも親を慕したひ。さいの河原を遙々と。迷ウ

ふて来たか可愛やと。いふにお鶴は。ヤアくく。そりやマア本の事かいなど立上るを引とめ。コリヤ娘。親子は一世の縁と聞。死だといふ事知てから。我レか逢つたら消おらふ。ちつとの間など置いてやりたい。顔の見たいはわれよりもおれも逢いたいくくと押へと、むる表の方。庄屋を先に所のあるき。死がい戸板に乗て駈込。コレく親父殿。孫を身代にと頼まれたか。過料身代で済ムは常の科人。禁断所と知て這入た大罪人。親類へ祟のながお慈悲じやと。可愛やこちとの居る前で成故に合ました。死がいを(八十三ウ) 慥に渡せと有。代官様の仰じやと。いふだけの事云渡し。歎きを見まいと足早に。打連立て帰りける。

お鶴は其俣かけ寄て。見ればあへなき夫の死骸。親子は夢の心地にて一間へかけ入尋れど。有共見へす幻の影にもあらぬ蜉蝣や姿は。きへて見へざれば。喝兒は膝行出孫市は相果しか。残念至極と氣をいらち。五臓もみ切無念の涙。伊之介も走出。と、様か居やしやれぬ。と、様呼て下されい。と、様のふと欠廻り。死がいを見るより縋り付。ヤアコリヤと、様は誰切った。誰が殺した是と、様。物いふて下されと足摺したるいぢらしき女房はいつそ狂気のごとく。扱は忠義にかたまりし魂魄で有たかい。跡に(八十四オ) 残つて是がまあ何と生て居れふぞ。一所に死たいくと死かいに取付母親に。又取縋る伊之介も俱に亡骸押うごかし。わつと泣入心根を思ひやつたる祖父喝兒。心余りて四人が。歎く涙は五月雨に。水倍増て浅沢におしや盛りの。杜若水に溺ることく也。

かゝる歎きの其中へ駕をつらせて鳥や才兵衛。ヤコレくお鶴。用意がよくば早ふおじや。サアく早ふと引立る。こりや何故と驚く祖父。ヲ、と、様合点か行まい。孫市殿が伴七に借しやんした。其金故に二度の勤。夫の役には立ね共。行ねば

お主の身の上。カ目の不自由なお前に此子。二世の夫トに死別れ。何と是が行れふ（八十四ウ）ぞいなア〜。か、様余所へ行しやるなら。わしも一所に連れて往て下され。無理もいふまい云事。聞ふか、様なふと慕ふ子を。祖父は這寄縋り付。扱も〜世の中に。親に放る、子も多いが。此様に又むごらしい。因果な事の数々が続けば続く物かいのと。かぞへ立たるくどき言。老の。涙ぞ果しなき才兵衛も持余し。コレ駕の衆。さつきにもいふ通り。涙もらふていかぬ商売。少むごいめ見にや成ラぬ心得太郎兵衛相棒庄六すがるを払ふ玉箒。無理に押込籠の鳥泣音こがる、雛鳥に。別れ行身は地獄の呵責。閻魔や牛頭守頭が駕に哀を乗て行。

引違ふて左海泰庵。息もすた〜いさみ声。サ、目出（八十五オ）たい〜御病人。たつた今孫市殿彼亀の生キ血を持て来て。尊公の身の上迄。残らす聞た忠義の次第。一時も早く調合の此薬。吞で本復あれよと。茶碗に移し差出す。

扱こそ是も靈魂の。賜物共と押載〜。家来も多き其中に勘当受し其方が。身を捨ての忠義心。本望達ッせし其上はそちが石碑を建立し。跡念頃に営まんと詞は今に荒陵山。四天王寺の西門に扇の石碑と著き。コハ有がたしと次左衛門。我は是より出家を遂。聳が菩提を弔はんと。迷ひの雲は払へ共。只晴レ間なき五月間。暗き眼病の便りなく後れ。晩稲や枯る身の。亡孫市が種残す。孫は早苗よ（八十五ウ）水の世話。せめては舞行秋の。田面を老の楽しみと。抱上ても見へぬ目に。涙はら〜落し水。

始終の様子を窺ふ悪者。中にも伴七踊り出。コリヤ〜喝儿其方か本名唐橋作十郎と知たる故。学太郎様の兼ての頼生捕てほうびにする。覚悟しほれと左右より。捕たとかゝるを身をかはし。死霊の力討添て腰背ぼん〜踏飛す。早明方を告る鶏。

東天紅のこへに連。病氣平愈なすからは。一時も早く打立んどつこいそふはと丑六万八。三人手玉に荒家の納戸くだけて住吉の。田植の景色見へ渡る。ハア誠に明れば五月廿八日。曾我兄弟が年来の敵を討し月も日も。けふ門ト出の最上吉日。ハ、ハ、ハ、悦ハしや（八十六才）と勇ミ立。追討敵に廻り逢。本望達ッして高天に名を翻す会稽や。多賀の誉と筆跡に残る。武名そへいざぎよき

## 第十

小人閑居して不善をなすと。古人の言宜成かな。爰にか、み山早枝家の分国。大道寺美作ノ守が居城の構。花壇築山草木迄。美麗を尽す殿造。剩へ嫡子学太郎栄花にほこり。姪酒乱防狼藉は類ひ。稀成行跡也。奥御殿には若殿の。所労を慰催ふしの。能も三番羽衣の。袖打かへす天乙女囃。地謡一様に。柳の腰や袖すりの。松の位の。一トかなで。心空なる気色かな。奥の囃子のもれてくる。謡は箆の切戸口。源太か背に指かさす。梅花にあらぬ古葛籠。背負て（八十六ウ）のかく定平が。入来る折から松浦軍蔵。出合頭に顔と顔。ヤアうぬは定平。合点行ぬは其葛籠。ソレ家来共引おろせと。下知に随ひ双方より。かゝるをはり退はつ飛し。庭上につつ立たり。イヤナニ軍蔵様。御推量の通り下郎めは。早枝の家来定平と申素奴。聊の誤り有て扶持に放れ。御縁家の此お屋しきへ御奉公が申たさ。態く参つた此奴め。何科有て此狼藉。ヤアぬかすまい誠奉公が望ならば違背に及ばぬ其葛籠。身が目通りで開いてみよ。アイヤソリヤ成ませぬ。半季溜りの奴が葛籠は。お大名の城廓同然。見せぬは曲者軍蔵が。直きに詮義と立かゝるを。一間の内より声高く。ヤレ待軍蔵早まるなど。奴引連賤機御前。しづくと立出（八十七才）たまひ。始終の様子はあれにて聞。御本家の家来と有ば。鹿略はあらじ詮

義には及ぶまい。此方の家を望奉公が仕たいとの事なれば。御本家へお尋か。お暇の出た其様子。とくと聞糺<sup>たじ</sup>した上。品によつたら召抱<sup>かよ</sup>ふと。詞<sup>地ハル</sup>に差出<sup>色</sup>る松浦軍蔵。イヤサア夫ではお家の為。あなた様には何事も御存しない故。采女之介殿の家来なれば。若殿様の。イヤサよしもあしきも自が心に有。新参の其方が差図<sup>さしづ</sup>は受ぬ推参者扣へて居よと<sup>すると</sup>矢御意。返<sup>地ハル</sup>す詞も長刀ナ柄<sup>フシ</sup>をひねつて扣へ居る。

折<sup>地ハル</sup>しも番士<sup>ばんし</sup>の声として。御上使<sup>ウ</sup>と呼はるにぞ。ハテ思ひがけなき上使のの御入とや。カ何はとも有自は此様子。美作殿へおしらせ申さん。イヤナニ軍蔵は御上使を。御饗<sup>もてなし</sup>応の用意せよ。コリヤ定平（八十七ウ）とやらんは部屋へ往て。休足<sup>きうそく</sup>しやと云捨<sup>地ハル</sup>一間へ入給へは。二人は心奥<sup>ウ</sup>と口別<sup>くちわか</sup>てへこそは入にける。

早御上使<sup>地ハル</sup>の御入と玄関<sup>中</sup>広間ひしめけば。衣服<sup>ウ</sup>改<sup>ウ</sup>メ美作<sup>みさく</sup>親子。賤機<sup>ウ</sup>諸共打連て儲<sup>もつけ</sup>の。席に出迎へは。程<sup>ウ</sup>なく入来る赤松民部之助藤忠。長<sup>ウ</sup>上下<sup>さばやか</sup>爽<sup>さばやか</sup>に。畳<sup>ウ</sup>さはりも故実<sup>ふるま</sup>を正し。悠々<sup>ゆうく</sup>と座<sup>シ</sup>に着ば。美作<sup>地ハル</sup>は両手<sup>りょうて</sup>をつき。御上使<sup>詞</sup>御苦勞<sup>ごくろう</sup>千万。駟<sup>詞</sup>学太郎所勞によつて引こもり。無礼<sup>ウ</sup>の略衣<sup>りやくい</sup>幾重にも御赦免<sup>ごしかめん</sup>有て上使の趣<sup>しゆ</sup>。具<sup>つぎ</sup>に仰下<sup>おんげ</sup>さるへしと慇懃<sup>いんきん</sup>に相述<sup>あひた</sup>れば。民部<sup>地ハル</sup>之助<sup>いさつぐ</sup>異義<sup>いぎ</sup>繕<sup>つくろ</sup>ひ。

上使<sup>詞</sup>の趣余<sup>しゆ</sup>の義に有す。今度<sup>ウ</sup>足利義満<sup>あしかがよしまん</sup>公。主上<sup>しゆ</sup>御幸<sup>みゆき</sup>の儲<sup>もつけ</sup>の為。洛西<sup>ウ</sup>に金閣<sup>きんかく</sup>を造栄<sup>ぞうえい</sup>有諸国<sup>しよこく</sup>の重器<sup>じゆうき</sup>を召る、所。多賀<sup>ウ</sup>早枝<sup>はやえだ</sup>の守<sup>ウ</sup>より献<sup>けん</sup>ずべき三品<sup>さんひん</sup>の御宝<sup>ごほう</sup>。紛失<sup>まご</sup>せしと上聞<sup>じやうもん</sup>に（八十八オ）達<sup>ウ</sup>し以ての外の御怒<sup>ごど</sup>り。則<sup>すなは</sup>ち所領<sup>しよりやう</sup>没収<sup>ぼつしゆ</sup>有べき筈<sup>はず</sup>なれ共。先祖<sup>せんぞ</sup>の武功<sup>ぶくう</sup>。老臣<sup>らうしん</sup>の忠勤<sup>しゆきん</sup>に免<sup>めん</sup>ぜられ。縁家<sup>えんか</sup>たる当家<sup>てんか</sup>より宝<sup>ほう</sup>の行<sup>ぎやう</sup>を詮義<sup>せんぎ</sup>して。差上<sup>さしあ</sup>らる、者<sup>もの</sup>ならば子息<sup>しよしき</sup>たる学太郎<sup>まなぶたろう</sup>へ。早枝<sup>はやえだ</sup>家の家督<sup>かとく</sup>相統<sup>さうと</sup>。並<sup>な</sup>びに領国<sup>りやうこく</sup>安堵<sup>あんと</sup>の御教書<sup>ごけいしよ</sup>下し給<sup>たま</sup>はるへしと有かたき詫意<sup>わぎ</sup>の趣<sup>しゆ</sup>。早速<sup>さつそく</sup>に上京<sup>じやうきやう</sup>し御受<sup>ごう</sup>有て然<sup>しか</sup>るべしと事<sup>こと</sup>こまやかに。演<sup>えん</sup>説<sup>せつ</sup>有。

学太郎ハツト頭を下。コハ忝はづかき御見出し。多賀の家門も多き中。某へ相続とは先祖の誉ほまれ身の面目。此上の有べきか。ナニ母人様にも。御悦うきび下されい。ヲ、夫レおとこ。優曇うとんげま花増りの君の御上意。ちつ共早ふ上京の。用意直様仕らん。出立いだしとせき立ど。騒さわがぬ美作みさくヤレ待駟。某か詞も待まちず籠忽そこつの振舞ふるまいへ（八十八ウ）よと。不興ふこうの躰たに賤機御前。イヤ申我夫マ。ケ程目出度我子の出世。門ト出とゞむる御所存はと云ハセの果すヤア何を女の小ざかしい。躬学こうがく太郎が不行跡ぎやうせき。殺生好ムのみならず。や、もすれば不骨乱妨ふんぼんぼう。必其身に過あやまちあらん。何卒とぞ他行をとゞめんと。乱舞らんぶを赦すも親の慈悲じじひ。其上今の上使の趣。三品の宝を詮義して差上よとの上意ならずや。早枝家の忠臣義士。心を尽し身を碎くだき尋て知れぬ宝の有所。中々たやすく輒つとく汝等か手に入へきか。白痴たわけ者と一句に話はられ親子共。詞なければ民部之助。ア、イヤ其義はちつ共氣遣きぢイ有な。宝詮義の其中は。譬たとへ半月げつツ一月いちげつツの延の引有共某か此地に逗留たうりゆう仕り。一品成共御子息より。差上らるゝ物ならば。武将の御前（八十九オ）は藤忠か宜すいしく吹拳ふいきま仕らん。心易こころやすかれ旁かたと仁愛厚あつき挨拶あいさつに。美作も力ちからヲを得。ハア重々深き御懇精こんせい。然らば暫時さんじの御猶予ゆうよ。ホ、心静しずかに詮義か肝要かんよう。御上使様には御退屈たいくつ。奥の一間で御酒一献けん。御肴にはふつゝ、かな女共か舞謡まいうた。打くつろいて御見物。此学太郎は詮義の手配ていばいり。自みづからは又饗もてなし応の。役義やくぎの人品しんひん赤松か。後刻ごこくと計式けいしき礼し。美作夫婦引添つかりて上使は。奥へ入にけり。引違ひだてお次より。立出たる松浦軍蔵。イヤ申若殿様。兼かみて仕込しこみし御大望。邪魔じゃまに成瀬左衛門めはぶち殺す。宝はこつちへせしめて置。何から何迄なんぢよい手つかひ。うまいうまいと主従しゆじゆう点しんき囁ささやきあふ。折をから表騒さはがしく下くだりおらふく。下れくだりかぬかと。留とどめてもいふても聞はこそ六十余りの五調ごせう（八十九ウ）親仁おやに薬ぐすりふご。わいかけ奥庭おくでん先。何の遠慮えんりょもぼつかばかくばかく。ハテ扱合あつか点てんの悪い人しやわいの。何ほ下れくだりといやつても。学太郎様にお目にかゝり。めつき



しやつきをせにや成ラぬ。とやかふ云ハずとコレ若殿に早ふ逢して下されと。云イツ、這入切戸口。見合す顔は。ヤ学太郎様。ム、梅ばら徳太夫。ハテ久しやと若殿の。したしき詞にしたり顔。イヤコレ若殿様。アイヤ学太郎様。エ、こなたはくくぬのふ。六十越した此親仁めに。命がけの大事を頼。仕負せたらはほうびの金。知行じやのと働らかせ。夫レ成に投やり三宝。けふが日迄に音沙汰も。なしも礫も打しやれぬは。フ、結構なお歴々。尤後日の合紋に預けて置カしやつた二品はといふを打消コリやく親仁。此方より音伝せぬは。深い所(九十オ)存有ての事。万事は身共か此胸に。心得たるかと目ませと仕方。イヤナ下部共。用事あらは呼出さん。皆々下れに下部共。打連部やに入にけり。

跡見送つて軍蔵は。徳太夫が傍に立寄て。扱々我はあやかり者。一大事の御用を仕負せ。ほうひは山程下さるゝ。シテ件の御宝は。お氣遣いなされますな。コレ此菓ふこにと。取出す柴船の花生御旗も俱に。学太郎が前に押直せば。ほくくくと打点き。ホ、出かしたく。ほうび取せんこなたへと。いふに様子も白髪に腰かめて蹲踞。油断を見すまし軍蔵が肩先ずつぽと一ト刀。切ラれながらもがむしやの老人。何科有て欺し討と。刀たぐつて投捨る。首筋掴んで学太郎。取て引寄氷の刃胸ナ元トぐつと。一トゑぐり。(九十ウ)フ、ハ、ハ、ハ、もがくはく。ほうびに目がくれうかくと。殺されに來た耄め。蛙は口からハテよいざまと。なぶり殺しに徳太夫。無念くぬのあをち死ニ。むざんといふも愚也。

死がいを傍への古井戸へ井打込サアよいは。二品の御宝御手に入は大望成就。片時も早く御上京と。申上れば成程く。汝は急ぎ供触の用意せよ。ハツト計に軍蔵がいさんで次へ走り行。跡見送つて学太郎。年々來仕込し我大望。早枝家を相続すれば。采女之介は有てなき者。ねかさふ起さふと皆是身共か心の俣力。力俣ならぬは傾城三国め。とこいつをなびける



一ト工面。ム、是をかうしてかうくと一人点く笑の眉。開く襖の。内よりも。三国太夫はけふの役。天の羽衣脱かへて襦袢たをやかに夫レとは見れど付ほなく。立寄塩瀬（九十一才）べに帛紗。おふくかげんと差出す。

何心なく取上る。薄茶にあらぬ恋人の。顔見て恠り学太郎。ホ、三国。有難いそもじか手前。併我を薄茶にもてなして。心の庭は井戸茶碗。深き采女へ濃茶をは。立る所存で有ふかなと。問かけられ。今更何と返答も。云いそ、くれてもぢくと。顔に照添紅ニぶくさひねる手元を。じつと取。いつ見てもく美しい御面相。コリヤよふ聞よ。我カ首たけ惚て居ればこそ。

舞子と名付呼寄しも。くとき落そふ我心底何と憎ふは有まいかな。采女之介は宝を失ひ。詮義仕出さにや身の越度。又嫌はれた此鼻は。今ン日上使を下されて。追付早枝の大殿様。そもじさへ合点なりや。直クに我女が御台様。サアどふしや。くと学太郎。細目に成て見とれ居る。アイ是迄度々（九十一才）御真実に。いふて給はるおまへのお詞。仇に聞ておりましたは。采女様へ立た義理。其殿様が又外に。増取有て見かへられ。本ンに身も世もあられぬ悲しさ。死ンで退ふと思ひしが。イヤくはからこつちも意地。あなたに随早枝家の御台様じやといはれなは是ぞ殿御へよい頬当と。思案極メてけふの役。是幸と此お屋敷。来事はきても御きげんが。もしやと案じた程もなふ嬉しい逢せと寄添てもたれか、りし。柳花雨をおびたる。風情也。

取て突退学太郎。あんまり恋路が味過て。めつたに応とは云いにくい。エ、コリヤ何じやな。某を欺からんと色でしかけて落し穴。憎ッいめろうめ。此館に置事叶はぬ。早立帰れ。遅ひと身共が手にかくると。思ひがけなき一言に。三国はわつと泣出し。采女様には見捨ら（九十二才）れ。又あなたには疑イ受。生きてかひなき私が身。お手にかゝるがせめての言訳。



が。栗毛フシの駒を引出す。

手綱地上かいくりひらりと乗。仰調に随ひ某は一先ッおさきへ上京致す。追付目出度御対面。イサ軍威ハルと勇フシ立都フシの空へと急行。

跡見送地色ノルつて賤機御前。目上に持涙はら〜〜と、め兼させ給中ひしが。何思ひけん懐くは劔はを抜ぬより早く。我と我。咽フシへがばと

突ウ（九十三ウ）立る。コハ何故と驚ハル民部美作大きに仰色天し。コリヤ賤機。御上使の手前と云調目出度ハルが門出に。不吉の

所為何故と。いふ顔地ハルつれ〜打守り。いたはしや我夫。学太郎が門出を。お前は出世と思し召か。アリヤ此母か拵こしらへ事。

家国の為いとし子を。欺たぼりすかしてむざ〜と。殺させにやるのじや物。何と死地ハルずに居られふぞと。聞地ハルて悔りとは何故に

とはいかに。子細を語れと氣をいらつ。手負ハルフシは。苦しき息中の下。エ、何故とはコレ殿。七万石の領主にて。榮えい曜よう榮花えいの学太

郎。何が不足で此工ミ。采女殿を科上に落し宝を奪くひ。早枝家を押領せんとの企くはを。聞度々に自上が。胸に釘針さゝる、心。

異見地色ハルも有へきお前迄悪事に一味も子故ウ（九十四オ）の闇。所詮我子あんおんが安穩ウでは。家国の為よからずと。心ウ一つに思案を極め

出世の門出目出たしとまざ〜偽り欺たぼつて。兄色の敵と喝ウ兒に。本望とほ遂とほさせ討ウれなは。適あつは最新れは武士成と。是迄地色上なしたる

積悪ウの。汚名おめいもす、ぎ二ツには。妻子二人調が先立色ば。一ウ念ほつき発ほつき起も仕給ウひて。お心も直らんかと。夫地色上レばつかりをウ樂しみに。

覚悟極めた我自害ウ。少人しは不便と思し召采女様との御和睦わぼく。調ウへてたべ殿様と。或ウイは諫いさめ或ウイは歎なげき。貞女ていじよの誠まこと鍛たふたる

刃やいばにつたふ。血ハルの涙ナ。渾ハルなす計也。美作地ハルは齒はがみウをなし。七調エよしなき女が道ウチ立ウから。大事を洩もちす其上に。愛子ウを

失きふ吃きつ悔くわさ。イテ追付てと欠出ウす。向ウふにすつくと采女之介。庭ウには定平二王フシ（九十四ウ）立勢フシひ込で詰調寄る。ヤアうぬ

は采女之介。身が屋敷へはいつの間に。ム、此奴が葛籠つちらの正体。若殿諸共入込ウだり。覚悟地ハル〜といはせもあへず。ヤアうづ

虫めらがほざいたり。よし／＼ハル 駈は討する共。御宝うぬに渡さふか。地みぢんになしてくれんずと二品目かけ飛かゝる。どつこいそふはと民部之助宝をかこふてつゝ立たり。ヤア今迄一味と思ひし藤忠。儕しも敵の廻シ者よな。ホ、云フにや及ぶ。奥様と申合して此二品。まつ斯奪はん謀。首尾よふ参つた上使の正体。お目にかけんと上下上着かなぐれば。下は木綿の町人姿。私めは九郎兵衛と申者。奥様に大恩受し糸商人。いつぞや早枝のお中屋敷。裏門通の水門より出たる曲者。顔は知ざるくら紛れ。儘に梅原徳太夫と。聞たら拔ぬ地獄耳。詮義の糸口奥（九十五才）様の。お差図請た贗上便。何卒御恩を報ぜんと。思ふ折からけふの役。まんまと仕おふせコレ殿様。悪事露頭の上からは。今より心をひるがへし御両家和睦といや応を。いはさぬ此場のしめくゝり実も糸屋が働き也。

采女之介声高くヤア／＼美作。迎も斯成貴殿の運命。今討取は安けれ共。賤機御前の貞心にて宝の二品手に入悦び。互の意恨は後日の再会。是を未来の土産にて成仏有や賤機と。哀レを跡に采女之介。定平九郎兵衛御供にて。しづ／＼采女は出給ふ。

思へは無念と美作か。欠出す裔に絶付。手負も今ぞ。断末魔哀。墓なやへ浮世也

## 第十一

かゞみ山街道筋。誰レが菩提に建置し閻魔堂を其俣に。仮りの此世の仮り住居罪も作らず草鞋（九十五ウ）を。作る片手にせんし葉を施すも又前キの世の。罪亡しと見へにけり。

所の者共てん手に簞ふりかたけ。マア一休ミと床几の上に腰打かけ。イヤコレ修行者殿。こなんはマア何の願かしらね共。



幡も見放し給か情なやと。天地ハルにさけび地に転び拳も碎る血キヲフシの涙中ハル哀と。いふも愚也。

ぜ地色ウひとまなや是迄と刀逆手に取直す。ふウしきや傍への草村より。一煙もゆると見へけるが。ハテ怪しや。五体すくんで働られぬは。ヤア夫なるは過キ去し孫一が靈魂成か。何故生害を止とどめしぞ。子細有てか何とく。ヤ、スリヤ学太郎が足を止しとや。シテ又敵はいづくに有。ヤ、ナニ中道筋の森の内。シ地ハルエ、有がたし忝しと。天にも上る心地にて中道。さして三重上行先の

森の茂みに学太郎。安否いかと心も空案る姿唐橋が。一目見るより欠来り。(九十七才)ヤア比興未練の学太郎。逃隠る、共天命逃れず。サアく勝負と詰かくる。返答もなく抜打を。飛しさつて突かくる。鎗術鍛術互の手續。血氣勇気の劣なく棒ハルにもんでそへ越しか。天理の枝先に非道の学太郎。ひるむを。透さず脇腹より纒なる一木に突立られ。狂ハルひ死に死たるは報フシの程こそ恐しき。かゝる所へ采女之介磯松新次郎。定平引連欠付給ひ。ホ、唐橋適手柄。簾花生も手に入しと。仰地ハルにハツト差出す一軸。新次郎取あへず奥方なき学太郎様の御最期。奥方の御遺言御本家への願イ叶ひ。則大道寺の家督采女之介様に御相続と。宝揃地ハルへば悦び多賀。寿ことづく国入や早枝ウの家の御繁栄。百万石の蔵入と目出度。筆を納めけり

寛政九年己四月廿三日 作者 奈河七五三助(九十七ウ)

右之本頌句音節墨譜等令加筆候

師若針弟子如縷因吾

儕所伝沂先師

翻刻『会稽多賀堂』

之源幸甚

竹本義大夫遺弟

竹本政太夫<sup>印</sup>

予以著述之原本校合一過可為正本者也

正本所<sup>同</sup>江戶堀江町四丁目  
日本橋四日市  
多田屋理兵衛版  
上総屋利兵衛版